二〇一八年一月一二日

窓の雪眺めつ啜る番茶かな　明日香
谷戸晴れて畝間畝間に薄氷　こすもす
着膨れてシートベルトのままならず　うつぎ
風花のヘッドライトに乱舞せる　よし女
霜柱さくさく踏んで吾傘寿　菜々

二〇一八年一月一一日

雲水の草鞋に今朝の霜深し　菜々
初投句記念切手が目当てかな　たか子
悪しき夢幾度目覚めぬ虎落笛　よう子
陽のあたる此処極楽と日向ぼこ　ともえ
ロープウェイ樹氷の梢足下とす　智恵子
一羽きて梢ぼるる寒雀　うつぎ
凝りたる道なころびそ医者通ひ　あさこ
新春の駅頭にはや献血車　せいじ
雲水の草鞋踏みゆく霜の道　菜々
寒禽の鋭声矢のごと雑木山　三刀

二〇一八年一月一〇日

雪しまく谷戸へ傾く電車かな　よう子
火の玉となり寒林へ夕日落つ　うつぎ
笑顔よき巫女より買はむえびす笹　菜々
黒潮へ絶壁なせる水仙卿　宏虎
初日記旅のチケットなども貼り　たか子

二〇一八年一月九日

日溜りへ出て読み返す初みくじ　なつき
初詣混む五円玉両替所　明日香
リリーフは屈強の婿餅を搗く　うつぎ

二〇一八年一月八日

一万歩コースを選び初詣　せいじ
騒めきの去りし神苑寒に入る　よう子
やや不満席譲られし初電車　満天
離陸機の過りしどんど煙かな　さつき
一斉に野球帽脱ぎ初詣　たか子
ま新し庭の客土へ寒の雨　菜々
ふうふうと湯気踊らせて七日粥　うつぎ

二〇一八年一月七日

命中の片腕翳す弓始　満天
息白く箱根の山を一気駈け　更紗
子ら去にてまた老二人薺粥　ぽんこ
厄除けの磴に存問冬桜　なつき
振舞の甘酒もろて包みかな　はく子
どんどの火果てて小暗き神の庭　宏虎

二〇一八年一月六日

太箸にやさしさ滲む嫁の筆　たか子
竹生島茜雲おく初景色　やよい
連凧の駈け上りゆく虚空かな　はく子
朝刊のポストはみ出す霜の花　うつぎ

毎日句会みのる選・二〇一八年一月一四日